

萬鉄五郎と土沢

《南画の系譜》

橋本雪蕉、菊池黙堂、菊池素香、萬鉄人（雲樵）

萬鉄五郎記念美術館開館40周年

令和6年

4月28日〔日〕

6月30日〔日〕

〔開館時間〕

8時30分～17時（入館は16時30分まで）

〔休館日〕

月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日に休館）

〔主催／会場〕

萬鉄五郎記念美術館

東京都花巻市東和町土沢5-1-1 電話0196-42-4405
TEL:0196-42-4402 FAX:0196-42-4405

〔入館料〕

一般 500（450）円

高校・学生 300（250）円

小学・中学生 200（150）円

*（ ）内は20名以上の団体料金

〔関連行事〕

第44回萬鉄五郎祭

〔日時〕 5月4日〔土〕 14時～14時30分

上澤アートクラフトフェア2024春

〔日時〕 5月4日〔土〕／5日〔日〕

〔同時開催〕

mate「マテ」シリーズ vol.13-1

小原馨展

〔会期〕 4月27日〔土〕～6月30日〔日〕

萬鉄五郎記念美術館



萬鉄五郎《蓬萊仙閣圖》紙本着色 1925年 萬鉄五郎記念美術

萬鉄五郎と土沢

《南画の系譜》

橋本雪蕉、菊池黙堂、菊池素香、萬鉄五郎（雪蕉）

萬鉄五郎（1885～1927）は、後期印象派やフォーヴィスムの新思潮をいち早く取り入れ、明治末から大正期を通じて前衛絵画の先頭に立ち日本美術界を牽引した画家です。

しかし、彼が少年期に山水画を学び、基礎的な描法を身につけていたことはあまり知られていません。さらに、1919（大正8）年に神奈川県茅ヶ崎へ移り住んでは、南画（文人画）と呼ばれる日本の伝統的な絵画技法とその哲学に自らの絵画表現との一致点を見だし、独特の筆致の洒落な作品群を残しています。

あらためて萬の南画の出発点を目を向けると、少年時代に浅井応翠の『山水画譜』を模写したことや、通信教育機関である東京の「速成文学会」で熱心に水墨画の基本描写を学んでいたことがわかります。さらに、地元絵師の菊池素香（1852～1935）に萬少年が水墨画を習っていたことが伝わっています。

素香は橋本雪蕉（1802～1877）に師事した絵師で、師である雪蕉は、浦上春琴の流れをくむ南画家として花巻や八戸で活躍し、多くの絵師を育てました。なかでも菊池黙堂（1835～1899）は素香にも指導していた兄弟子であり、土沢を含む花巻地域には、雪蕉、黙堂、素香、そして萬へとつながる地方南画の系譜をたどることが出来ます。

本展では、萬鉄五郎が表現者として素養を育んだ故郷の先人南画家から彼へと連なる地方の絵画文化の系譜を辿るとともに、萬が南画と洋画との一致点を見だし、日本人ならではの独自の表現へと昇華させていった表現性に内在する絵画観に迫ります。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

- ① 橋本雪蕉（松柳山水人物図）絹本淡彩 1865年 花巻市博物館
- ② 橋本雪蕉（初夏山水図）紙本墨画 1867年 花巻市博物館
- ③ 菊池黙堂（携琴訪友図）紙本淡彩 1895年 花巻市博物館
- ④ 菊池黙堂（洗硯魚石）紙本淡彩 1888年 花巻市博物館
- ⑤ 菊池素香（山水図）絹本着色 1920年 個人
- ⑥ 菊池素香（聖人之図）紙本淡彩 制作年不詳 個人
- ⑦ 萬鉄五郎（《念》景（雪道を行く男））紙本墨画 1914年頃 萬鉄五郎記念美術館
- ⑧ 萬鉄五郎（秋景農夫図）紙本墨画 1922年頃 萬鉄五郎記念美術館
- ⑨ 萬鉄五郎（帰りの道）紙本墨画 1922年頃 萬鉄五郎記念美術館
- ⑩ 萬鉄五郎（水のほとり）油彩・画布 1924年 萬鉄五郎記念美術館

第44回萬鉄五郎祭

● 萬鉄五郎祭 式典
 《日時》 5月4日〔土〕 14時～14時30分
 《会場》 萬鉄五郎記念美術館

● 萬鉄五郎祭 茶会
 《日時》 4月14日〔日〕 10時～15時
 《会場》 東和コミュニティセンター（花巻市東和町安俣6-53）
 《参加費》 二席 1000円

● 写生会
 《日時》 4月28日〔日〕 9時～12時
 《参加費》 500円（幼児から一般まで）
 参加者には作品をプリントしたエコバックを差し上げます。

● 写生作品展
 《日時》 5月11日〔土〕～5月26日〔日〕
 《会場》 花巻市立東和図書館ロビー（花巻市東和町安俣6-90）

土澤アートクラフトフェア 2024 春
 《日時》 5月4日〔土〕／5日〔日〕
 《場所》 土沢商店街／萬鉄五郎記念美術館前

小原馨展
 [同時開催] iwate コンテンポラリーアート vol.13-1
 《会期》 4月27日〔土〕～6月30日〔日〕
 《開館時間》 9時～16時30分
 《休館日》 月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日）
 《会場》 萬鉄五郎記念美術館「八丁土蔵ギャラリー」
 《入館料》 入館無料

